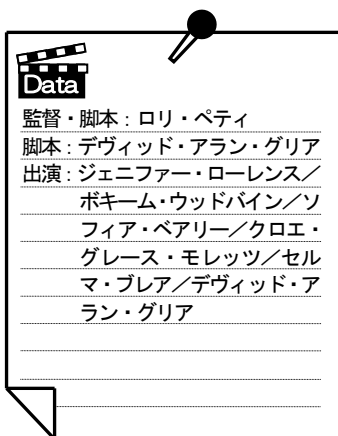




👁️👁️ みどころ

今をときめく若手女優ジェニファー・ローレンスとクロエ・グレース・モレッツが6年前に三姉妹の姉妹役で出演。当時17歳で脚本を読んだジェニファー・ローレンスの、女優としての決断力とその演技力に拍手！

しかして、その早熟ぶりは？また、14歳の見事な決断ぶりは？

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— *

■□■08年の映画が、今なぜ公開？■□■

一人の俳優が大ブレイクすれば、それまであまり陽の目を見なかったその俳優の旧作品も受けるのでは？まして、かつて幼い姉妹役で出演していた2人が2人とも女優として大ブレイク中、となれば絶対！そんな商魂たくましい思惑で上映されたのが、08年にアメリカで公開された本作だ。

三姉妹の長女アグネス役が『世界にひとつのプレイブック』（12年）（『シネマールム30』30頁参照）でアカデミー賞主演女優賞を受賞し、『ハンガー・ゲーム』（12年）（『シネマールム29』234頁参照）、『ハンガー・ゲーム2』（13年）、そして、『アメリカン・ハッスル』（13年）（『シネマールム32』掲載予定）等で大活躍中のジェニファー・ローレンス。そして、三女キャミー役が『キック・アス』（10年）、『キック・アス/ジャスティス・フォーエバー』（13年）等で大活躍中のクロエ・グレース・モレッツだ。それだけの理由でも一見の価値ありだが、当時17歳だったジェニファー・ローレンスが本作で2008年ロサンゼルス映画祭優秀演技賞を受賞しているとなると、なおさら・・・。

■□■原題の『ポーকার・ハウス』とは？■□■

本作の原題は『ポーকার・ハウス』。これはアイオワ州の田舎町にある飲み屋と賭博場と

売春宿を兼ねたような店で、夜毎、遊び人やヤクザ者が集まってくる所らしい。時代は1976年というから、どうしてそんな時代設定に？誰でもそう思うはずだが、それは、本作が初めての監督作品となったロリ・ペティの自叙伝的体験を、新進女優のジェニファー・ローレンスに託して本作を作ったためだ。

当時17歳だったジェニファー・ローレンスも本作の脚本を読み、暗い物語ながらその社会問題提起性に共鳴し、迫真の演技で監督自身の体験談をスクリーン上に体現している。意思の強そうなしっかりした顔立ちは今も同じだが、ジェニファー・ローレンスは本作では売春婦の母親サラ（セルマ・ブレア）の恋人デュバル（ボキーム・ウッドバイン）の甘いキスにとろける14歳の悪い娘の姿を演じたり、デュバルからレイプされるや一転してデュバルに向かって拳銃をぶっ放す気丈な姿を演じたり、と大活躍だから、ジェニファー・ローレンスのファンは必見！

■□■自分が売春婦だから娘も……。そんなバカな！■□■

自分が売春婦としてしか生きられないから、娘も年頃になったら売春婦を……。サラがそう考えていることは、アグネスとサラとの会話で明らかだが、ホントにそんな母親っているの？本作はアグネスのプロローグが目立っているが、父親の暴力による両親の離婚、女手一つで育てられる中で母親の男関係のだらしなさ、そして自分は三姉妹の長女。そんな境遇でそんな



● The Poker House LLC 2009

立場になると、本作のアグネスにみるような、気丈な性格の女の子になるようだ。

母親の方は14歳の娘を既に女としての「対抗心」を持って見ているようだが、アグネスの方はまだまだ子供……。男の目にはそう思えるが、デュバルととのろけるようなキスの味をほめあげるセリフが何度も登場してくるから、女の子はやっぱり早熟……。アグネスの日常は、①学校の勉強、②新聞社でのバイト、③バスケット部の選手としての活動の3つが主だが、誰よりも早く起き誰よりも遅く寝て、それをこなしているらしい。そんな彼女には今、何よりも大切なバスケットボールの決勝戦が迫っていたが……。

■□■「三姉妹もの」の名作と対比すれば……。■□■

「四姉妹の物語」はレイザー・メイ・オルコット原作、マーヴィン・ルロイ監督の『若草物語』（49年）と谷崎潤一郎原作、市川崑監督の『細雪』（83年）が双肩。他方、「三姉妹の物語」は、メイベル・チャン監督の映画『宋家の三姉妹』（97年）と井上靖の小説

の『淀どの日記』が双肩だ。『宋家の三姉妹』は幼少期よりも、成年となり、富を愛した長女・霽齡、国を愛した次女・慶齡、権力を愛した三女・美齡として、歴史の中に名を残す時代になってからの物語の方が面白い（『シネマルーム5』170頁参照）。また、浅井長政とお市の方との間に生まれた茶々、初、江の三姉妹も、幼少期よりも、豊臣秀吉の側室（＝淀君）、京極高次の側室、徳川秀忠の側室として、それぞれ歴史の中に名を残す時代に入ってからのも物語の方が面白い。

しかし、本作では長女のアグネスがまだ14歳だから、次女ビー（ソフィア・ベアリー）も三女キャミーもほんの子供。したがって、母親との関係では、これから売春婦として生きていくべきか否かを迷っているアグネスの姿が顕著だが、2人の幼い妹との関係では、何かとその世話をする「良きお姉さん」としての姿が顕著だ。自分はある程度の判断力ができているから、ポーカー・ハウス内に住んでいても平気だ（抵抗力がある）が、幼い妹たちには悪影響ばかり。そんな判断の下、アグネスはビーとキャミーをできるだけポーカー・ハウスから遠ざけようとしていたから、そこから生まれてくる2人の生活ぶりが面白い。

三女を演ずるクロエ・グレース・モレッツの美女ぶりは、なるほどと思わせるが、ちょっと太目の次女を演ずるソフィア・ベアリーのひょうひょうとした演技も面白い。王兵（ワン・ビン）監督の『三姉妹～雲南の子（三姉妹／Three Sisters）』（12年）ほどの悲惨さ（『シネマルーム30』184頁参照）はないが、アグネス、ビー、キャミー三姉妹の子供時代の生態に注目！

■ 14歳の「決断」に拍手！ ■

1976年当時のアイオワ州の片田舎では、バスケットボール選手のアグネスがどんな選手に憧れていたのかが全くわからないから、部屋の中にベタベタと貼ってある選手の写真や、クライマックスとなる試合でのアグネスの大活躍ぶりはよく理解できない。また、当時どんな音楽が流行っていたのかが全くわからないから、後部座席に2人の妹を乗せアグネス自身が車を運転して家出していくラストのシーンで、3人が熱狂的に歌う曲も全然理解できない。

しかし、デュバルからレイプされたその日のバスケットボールの試合に遅ればせながら出場し、後半だけで20点以上の得点をたたきだしたアグネスはすごい。さらに、これを機会にポーカー・ハウスと母親に見切りをつけ、14歳にして2人の妹と共に新たな世界に飛び出していくアグネスもすごい。なるほど、ロリ・ペティ監督は14歳の時にこんな体験をしたわけだ。

もっとも、最近の女の子の「初体験」の年齢は徐々に下がっているが、1976年当時のアメリカの片田舎で14歳の初体験というのは少し早すぎるのでは？ また、それがレイプ（まがいのもの）になったことについては、男の私の目から見ればアグネス（＝ロリ・ペティ監督）にも多少の責任（＝ワキの甘さ）があったのでは？ そう思える面があるので、ロリ・ペティ監督も少しは反省を・・・。

2014（平成26）年2月27日記